

リヨ市立図書館のバランシユ草稿
について

高尾謙史

ある作家や思想家を文学史や思想史のなかに嵌めこむことに對しては、その作家や思想家の愛読者からつねに不満が呈されるのだが、少なくとも書店のどの棚に並べられるかを示す程度の意義はあるだろう。しかし一九世紀フランスの作家であり思想家であるピエール・シモン・バランシユの場合、文学史にも思想史にもこれと決まった指定席はない。もともと、手近の事典類には、ロマン主義の思想に大きな影響を及ぼした作家、といった程度の記述はある。たとえば一八〇一年に出版されたバランシユの処女作『文学および芸術との關係において考察された感情について』は、内容的にはその翌年に出たシャトブリアンの『キリスト教精髓』を先取りしている。ただし文学史的には後者だけが有名になった。また、一八三一年の『エバルの靈視』という作品は、ロマン主義的な「人類の叙事詩」というジャンルの先駆として、エドガール・キネの『アスヴエリュス』(一八三三)あるいはラマルティエヌの『ジョスラン』(一八三六)や『天使の墮罪』(一八三八)などの構想に少なからぬ影響を与えている。さらに、ヴィクトル・ユゴーの死刑廃止

論はバランシユのそれをそっくり引き写したようなものだって言ってもよい。にもかかわらずバランシユの名はこれら大作家の陰に隠れて見えない。文学史においてマイナーだといっただけでなく、宗教的、政治的に見て伝統主義にも進歩主義にも分類されうるような不安定なところがあるという意味でも、バランシユの指定席はない。たとえば、社会制度や言語は人間のつくりだしたものではなく、啓示として神から与えられたものであると考える点では、ルイ・ド・ボナルドやジョゼフ・ド・メストルなどの反動的神政主義者の列に加えられることが多く、フランス革命から二月革命までの時期のキリストに関する言説を収集分類したフランク・ポール・ボウマン著『パリケードのキリスト』(一九八七)も、まさにこの三人を神政主義イデオログの代表として論じている。他方、人類はそのような啓示としての社会制度に育てられながら、なおかつそこから脱け出ようとする方向性をもっている、とバランシユは説くのであるが、このような考え方は、たとえばアンリ・トロンシヨンの『フランスにおけるヘルダールの知的遺産』(一九二〇)によって、ヴィーゴ、エクシュタイン男爵、ジュール・ミシュレ、エドガール・キネらとともに自由主義的歴史哲学として扱われている。また、同時代人シャルル・ノديهは、バランシユの歴史哲学である「社会転生論」の理念を、フリーエ主義およびサンシモン主義と一括して人間中心主義的進化論として批判している。このように伝統主義にも進歩主義にも分類されるバランシユの思想を、カトリシズムを時代の変化に適合させようとした「ネ

オ・カトリシスム」と捉え、シャトブリアン、ラムネ、オザナムなどの系列の筆頭に置いたのはポール・ベニッシュウの『予言者の時代』(一九七七)である。

このほかにも balan シュの名が登場する文脈はいくらでも挙げられるが、もっとも安定して大きな位置を balan シュが確保しているのは、次のような研究書の書名が示す主題においてであろう。すなわち、オーギュスト・ヴィアット著『ロマン主義の神秘的源泉』(一九二七)、ブリアン・ジュダン著『フランス・ロマン主義におけるオルベウス主義の伝統と神秘主義的思想』(一九七二)。ジャック・ロースは『哲学的神秘主義の文学的諸相』(一九五一)の代表として、イギリスのブレイク、ドイツのノヴァーリス、フランスの balan シュという三人を取りあげている。一八世紀後半以降のオリエンタリズムのなかに balan シュを放りこんだレーモン・シュワップの『東洋ルネサンス』(一九五〇)もこの延長線上にあると言つてよい。

balan シュに対する私の関心は、あえて言えば最後に挙げた文脈、すなわち一九世紀フランスの神秘学の系譜という視点からのものが一番大きい。しかしそれは、balan シュの思想を何かの「源泉」として捉えようとするだけでもなければ、影響関係の網の目のどこに位置づけるべきかを探ることでもない。だいたい、一九世紀フランスの神秘学という枠組自体、「実証科学の時代における反合理主義」という以上の意味をもつのかどうか甚だ疑問である。

諸宗教の教義が結晶した象徴や神話、太陽系惑星および黄道十二宮という二系列の象徴体系の結合としての占星術、その占星術と分かちがたく結びついている錬金術の象徴体系、ヘブライ語二十二文字と対比される二十二枚の大アルカナと五十六枚の小アルカナから成るタロット、中国の易など、現在ではほとんど意味不明の暗号と化している古来の様々な象徴体系には存在および生成の謎を解く鍵が内蔵されているという仮定のもとに、それらの象徴体系を新たな解釈によって復元ないし再構造化しようとした人々がいる。たとえばカバラのゲマトリアにも似た独自の教智学 arithmétique を考案したルイ・クロード・ド・サン・マルタン(一七四三—一八〇三)、ヘブライ語の新たな語源学によって『創世記』の冒頭部分を解釈しなおしたフーブル・ドリヴェ(一七六八—一八二五)、存在と生成の構造記述であると同時に一種の予言装置でもある「アルケオメートル」archéomètre を、占星術の象徴やフーブル・ドリヴェの語源学から案出したサン・ティエーヴ・ダルヴェードル(一八四二—一九〇九)、『数によって表現された存在の調和』(一八四七)でサン・マルタンの数秘学を展開した P・F・G・ラキユリア(一八〇五—一九〇)、様々な伝統的象徴体系を「コスモゾフィー」cosmophie という理念のもとに綜合しようとした S・U・ザンヌ(一八三八—一九二三)など。もちろんここに、エリファス・レヴィ(一八一〇—一八七五)やパピュス(一八六五—一九一六)の名を加えてもよい。これら伝統的知識の再解釈、

再構造化の試みのなかにバランシュの思想をおいてみることもっとも、バランシュには、いま挙げた人々のように秘密の導師から伝統的知識を直接授けられたというような事実(あるいは伝説)はないし、占星術や錬金術や数秘術を研究していた痕跡もないから、同列に置くことはできないかもしれない。しかし、神の啓示としての伝統と人間の自由、という問題を生涯にわたって考え続けたバランシュは、サン・マルタンやフアール・ド・リヴィエの仕事に並々ならぬ興味を抱き、これに実証的基盤が加わる「科学の未来」を予測すると同時に、そのような研究をする人間自身がそれを通じて変容していかなければならないという倫理的展望をも呈示している。神から与えられ、共同体の本能のごときものとして機能し、生き生きと体験されていた象徴体系が、現在では意味不明の暗号と化している、ということが伝統的知識の再構造化作業の前提であったが、バランシュの思想には、この暗号化の過程が意識の進化にとって必要不可欠なものであるという認識があり、またその過程のメカニズムに関する省察がある。伝統的知識の探究者は当然のことながら伝統的社会(神から与えられた言語、知識、制度、階級、秘教と顕教の峻別)を絶対的に肯定しがちであるが、バランシュによれば、人間は社会的伝統に教育されることによって育つ以外にないものの、その先に、自分の思考と感情と行動が伝統に支配されて機械的に動いていることに対する自覚がないかぎり、伝統的知識の探究は不可能だということになる。バランシュが好んで引用するアフォリズムにもあるように、「^{イニシエーション}奥義伝授が完了

するためには、奥義被伝授者は奥義伝授者を殺さねばならない」のである。このような視点をもつバランシュの思想を、サン・マルタンからパピュスへと引き継がれていく伝統的象徴体系の再構造化作業の系譜のなかに置くことは、その作業を相対化するためにも、それに認識論的基礎づけを与えるためにも有効であると思われる。

さて、一九世紀に行なわれた伝統的知識の再解釈、再構造化を研究しようとする者にとって、フランスのリヨン市立図書館の草稿室は宝庫であると言っても過言ではない。そこにはまず、サン・マルタンの友人でもあり一八世紀末のフリー・メーソンの中心人物でもあった「リヨンの神秘家」ジャン・バティスタ・ヴィレルモ(一七三〇—一八二四)とその周辺に関する、書簡を中心とする資料類が相当量収められている。またラキエリアの草稿、サン・ティエーヴ・ダルヴェードルの『アルケオメイトル』出版にまつわる資料、S・U・ザンヌの未完の大著『グランド・コスモゾフィー』の原稿がある。何冊かの著作によってその思想の概略をつかむことのできるS・U・ザンヌの二千ページを越える主著『グランド・コスモゾフィー』は、一度も印刷されたことがなく、弟子たちの手で筆写された原稿が何部か存在すると言われているが、そのうちの一部がここに収蔵されているわけである。そして、パピュスの多数の草稿と書簡がある。このような環境のなかにバランシュの草稿は保存されている。

バランシュ(一七七六一—一八四七)の草稿について述べるまえに、まずその著作活動を簡単にしておこう。

一八〇一年 『文学および芸術との関係において考察された感情について』

一八〇五年 『教皇ピウス七世のリヨン来訪に関する一リ

ヨン青年の友人宛書簡』

一八一四年 『アンティゴネー』

一八一八年 『社会制度論』

一八一九年 『老人と若者』

一八二〇年 『名のない男』

一八二七年 『社会転生論序説』

一八二九年 『オルベウス』

一八三〇年 『著作集』(全四巻)

一八三一年 『エバルの靈視』

一八三三年 『著作集』(全六巻)

これらは単純に三期に区分することが可能である。第一期は一八〇一年の『感情について』と一八〇五年の『書簡』。第二期は一八一四年の『アンティゴネー』から一八二〇年の『名のない男』まで。第三期は一八二七年の『社会転生論序説』以降。このうち第一期の二作はのちのバランシュによって顧みられることがなかった。また第二期の四作は、一八二七年の『社会転生論序説』により、広義の「社会転生論」著作群と見なされる。狭義の「社会転生論」著作群は、その『序説』を皮切りに、一

八二九年の『オルベウス』を第二巻とし、さらに『贖罪都市』、『ローマ民族の歴史に応用された万民族の歴史の公式』、『哀歌』と続く全五巻構想であった。一八三〇年の『著作集』はその構想を一挙に実現するためのものであったが、七月革命の出来によって頓挫し、結局は既刊の『オルベウス』までしか収録されていない。一八三三年の著作集も内容的にこれと変わらぬ。『エバルの靈視』は未刊の『贖罪都市』の一挿話である。これ以外に、『贖罪都市』や『公式』のための断章を中心に幾つかの雑誌論文があり、さらに、一八一六年度のリヨン学芸アカデミー活動報告と、一八四二年のアカデミー・フランセーズ入会演説が活字になっている。雑誌論文の発表は、一八四五年の「アレクサンドリアに関する断章」を除けば、すべて一八三五年以前である。

バランシュの著作活動を概観して気づくのは、第一期と第二期のあいだ、第二期と第三期のあいだ、そして一八三五年から一八四七年までのあいだという、比較的長い三つの空白期間が存在することである。伝記的には生涯にわたってほぼわかっていないから、バランシュ研究の上で問題となるのは、これらの空白期に書かれていながら人知れず眠っている草稿があるかどうかということである。結論を言うと、第一と第二の空白期に書かれたと思われる草稿類は量的にも質的にもたいしたものではなく、また年代確定がむずかしい。したがって、バランシュの草稿に対する主な興味は、活字になった作品に関連するものと、一八三五年以後の活動にまつわるものの二つに向けられること

になる。

存在が知られているバランシュの草稿は、個人所有のものを除くと、パリ国立図書館、アヴィニョンのカルヴェ図書館、リヨン市立図書館の三箇所⁽³⁾に保存されている。パリにあるのは書簡であり、アヴィニョンにあるのはリヨン草稿の写しであり、遺稿その他の原稿類はすべてリヨンにある。バランシュの遺稿は年下の友人ド・フイユ伯爵夫人によって保管されていたが、一八六二年の同夫人の死に際し、その遺言に従ってリヨン市立図書館に寄贈された。その後、やはりバランシュの年下の友人であった詩人ヴィクトル・ド・ラブラドの手によって整理分類され、分類番号が一度変更されたほかはそのままの形で現在に及んでいる。

二十通ほどの自筆書簡が様々な分類番号のもとに散らばっているが、それ以外の草稿は分類番号一八〇六一—一八一〇に集められ、全部で二十三のブロックに区分されている。その概要は次のとおり。

- 1、草稿の由来その他に関するヴィクトル・ド・ラブラドの覚書。
- 2、『贖罪都市』の草稿。
- 3、『公式』の草稿。
- 4、『公式』第三部および『歴史の弁神論』の草稿。
- 5、一八三〇年版『著作集』の出版案内書の草稿。
- 6、『アンティゴナー』の草稿。

- 7、『名のない男』の草稿。
- 8、『社会転生論序説』の草稿。
- 9、『社会制度論』の語彙索引の草稿。
- 10、『オルベウス』の草稿。
- 11、『エバルの霊視』の草稿。『歴史の弁神論』およびその他の草稿。

- 12、『予感』および『旧思想と新思想瞥見』と題された草稿。
 - 13、水力機関および蒸気機関に関する覚書草稿。
 - 14、アカデミー・フランセーズ入会演説草稿。
 - 15、哲学的、宗教的断章。
 - 16、『著作集』に収められている初期散文の草稿。
 - 17、『哀歌』の草稿。その他多種多様な断章。
 - 18、『カトリック百科全書』「序文」の草稿。「ボナバルト」
 - 19、『詩についての試論』と題された草稿。
 - 20、多種多様な断章。
 - 21、ロシアの政治と宗教に関する草稿。
 - 22、古代史研究ノート。
 - 23、バランシュの名刺。
- 一律に草稿と書いたが、実際には自筆原稿、他人の手による筆写、ゲラ刷りなどが混在している。ここでは詳細は省く。以下、実際に草稿に接してはじめてわかったことを二、三指摘しておきたい。
- バランシュの生前に刊行された著作に関連する草稿で注意を

要するものは、『社会制度論』のそれである。活字になった部分の草稿は存在せず、9の興味深い「語彙索引」は残念ながら書物に挿入されていない。また、12の「旧思想と新思想瞥見」と18の「詩についての試論」は、内容的には明らかに『社会制度論』の初期形態と思われるが、この点に言及した研究者はまだいない。

一八三五年以降の balan シュの知的エネルギーは、『贖罪都市』と『公式』の執筆、「社会転生論」の構想自体の練りなおし、水力機関および蒸気機関の研究と設計に向けられたと考え、水力機関および蒸気機関の研究と設計に向けられたと考え、これに関する出版計画を抱いていたことがわかっているが、これに関する草稿類は残念ながら一切ない。水力機関、蒸気機関の研究に関してはかなりの量の覚書が13に収められている。それらは大きく二つに分けられる。一つは、これまで自分がいかなる水力機関、いかなる蒸気機関を開発研究してきたか、その経緯を科学アカデミーに報告するための草稿。もう一つは、河の水を作業物質とする水力機関で動く船の設計。これらがどの程度の研究水準にあるかは、専門家の判断に委ねるしかないが、balan シュにはこれらの研究を永久機関の夢に結びつけていたふしがある。

2の草稿をもとに『贖罪都市』を活字にしたのは、一九〇九年のポール・ヴェリオ、一九二六年のアマン・ラストゥール、そして一九八一年のリュオン大学グループである。また、オスカー・A・ハークは3の草稿をもとに全三部の『公式』の第二

部を活字に起こした。⁽⁸⁾

『社会転生論』の構想がやがて『歴史の弁神論』に姿を変えたことについては別の機会に述べたことがあるが、『歴史の弁神論』の「献辞」と「序文」が、4、11、19に散らばっている。前述のハークは、この「序文」が未完結で混乱した文章だと述べているが、それは「序文」が二種類あることを見落とし、原稿の順序の乱れを考慮に入れなかったためである。また、この二種類の「序文」の初期形態である『カトリック百科全書』のための草稿は、15、18、19に散在している。⁽⁹⁾

また、19、21、22に収められたローマ史および古代の著述家に関する草稿は『公式』のための研究ノートと思われるが、これらの草稿はすべて balan シュの共同研究者フォサティの手になるものである。⁽¹⁰⁾

その他、17と19には、記憶、永遠と時間、予言などに関する考察からフリーエ主義やサンシモン主義に対する批判、さらにはオエネ・ウロンスキイについてのメモまで、短いけれども非常に興味深い断片が無秩序に放りこまれている。

草稿全体の大まかな分類はされているが、細部はかなり混乱しているから、研究者は草稿カタログの記述に注意してかかる必要がある。たとえば、霊的極性が一五世紀に大きく変動したのち、一九世紀のいま逆方向に再び大きく動きつつある、というような奇想を書きつけた紙が、アカデミー・フランセーズ入会演説原稿のあいだから出てきたりするのである。

